特集　原爆表象／文学と政治的リアリズム

本特集では二〇一〇年一〇月三日（日）に広島大学東広島キャンパス学士会館で開催したシンポジウムの成果を報告する。このシンポジウムは「原爆表象／文学と政治的リアリティ」をテーマとして、二〇一〇年度日本社会文学会秋季大会・第三二回原爆文学研究会の二日目に行ったものである。基調報告者は、短歌研究者の松澤俊二氏（桃山学院大学）・現代美術研究者の加治屋健司氏（広島市立大学）・三島由紀夫研究者の柳瀬善治氏（静宜大学）、コメンテーターは、哲学研究者の岩崎稔氏（東京外国語大学）・日本近現代史研究者の加納実紀代氏（敬和学園大学）に依頼した。企画者としては、専門領域を越えて多角的にシンポジウムのテーマに迫ることを狙って登壇をお願いした方々である。

特集では、まず松澤氏・加治屋氏・柳瀬氏の基調報告を三氏に文章化していただいたものを当日の登壇順に掲載する。次に岩崎氏・加納氏によるコメントとそれに続く全体討論を録音記録から文章化したものを掲載する。最後に司会者である深津謙一郎氏（共立女子大学）と水川敬章氏（日本学術振興会特別研究員）から寄稿していただいたシンポジウムの印象記を掲載する。

開催に先立って司会者から提示された企画説明は次の通り。

加納実紀代氏・岩崎稔氏・柳瀬善治氏・加治屋健司氏・松澤俊二氏

企画説明

過去に起きた出来事、その経験・体験に触れることは可能なのだろうか。哲学者・美術史家ジョルジュ・ディディ＝ユベルマンは、アウシュヴィッツの悲劇を表象不可能であるとする論客に対して、その経験・体験は表象可能だと厳しく論駁した。その正否は単純に見定められるものではないが、ひとまずユベルマンに寄り添うならば、文学や視覚表現のイメージ＝表象に真摯に向き合うことで、この神学的な問いに応答できよう。

原爆体験と表象／文学という設定において、この問いと深く

司会　水川敬章氏

関わるのが、被害と加害をめぐる議論である。原爆を戦争被害の象徴と見なしてその不当性を語れば、原爆を戦争加害の必然的な帰結と見なしてそれを正当化する反論を招く。早期終戦人命節約論、戦時復仇論、核抑止論といった政治的リアリズムに由来する原爆正当化論は根強いため、栗原貞子の詩「ヒロシマというとき」に端的に表れているように原爆表象／文学が置かれる文脈は常に闘争的にならざるをえない。政治的リアリズムは人々の経験・体験を演算可能な数値に変換し平板化するが、原爆表象／文学はそれとの対峙を避けられない。

さらに言えば、この被害／加害論は戦争責任という未決の問題とも不可分である。東京裁判、サンフランシスコ講和条約、高度経済成長といった流れの中で昭和天皇の免責、軍部への責任集中、アジアの軽視を一貫させてきたことが多くの日本人の責任意識を希薄化した。この点において戦争責任は「戦後」責任でもあるはずだが、その希薄さの由来もまた、政治的リアリズムのエコノミーの次元での思考に深く関わるであろう。

日本社会文学会と原爆文学研究会の共催というまたとない機会に恵まれた今大会のシンポジウムにおいて、原爆表象／文学を手がかりとして、政治的リアリズムとは別の現実性ある、望ましい社会を構想する力となる被害／加害論、戦争責任論の地平を獲得すべく、議論を構築したい。

司会　深津謙一郎氏